

3) 意識障害を初発症状とする解離性大動脈瘤について

—救急医療における頸動脈エコーの有用性について—

榛沢 和彦・大関 一
 諸 久永・林 純一
 江口 昭治 (新潟大学第二外科)
 伏島 徹・中川 忠 (北日本脳神経外科)
 今野 公和 病院
 中島 孝・福原 信義 (国立療養所犀潟
 病院神経内科)

我々は意識障害を初発症状とした解離性の胸部大動脈瘤を経験し、その診断に頸動脈エコーが有効であったので報告し、さらに頸動脈解離における頸動脈エコー上の特徴的所見を認めたので報告する。症例は64才女性、突然の意識障害で発症し、ショック状態で来院した。頭部CTでは頭蓋骨に出血を認めず、頸動脈エコーで右総頸動脈に解離によると考えられる血栓形成を認めた。そこでivDSA施行したところ右総頸動脈の解離所見と右内頸動脈の閉塞所見を認め、また心エコーでは上行大動脈の拡張と2度の大動脈弁閉鎖不全を認めたことから解離性の胸部大動脈瘤と診断した。

頸動脈エコーにおける頸動脈の解離所見として血栓形成を認めることはまれである。そのかわりに血管の短軸像のカラードプラー法で左右に色が異なる半月状パターンが多く認められた。そこでポリエチレンチューブを用いたファントム実験を行い、チューブのなかに小さなflapを入れたところflapよりも末梢側のスキャンで半月状パターンが得られた。よって頸動脈エコー検査では解離で生じるflapにより半月状パターンが得られる可能性が示唆され、頸動脈解離の診断に有用であると考えられた。

4) 外傷性顎顔面骨折の臨床的検討

小林英三郎・高田 正典 (日本歯科大学)
 渡辺 陽・金子 恭士 (新潟歯学部)
 土持 眞・又賀 泉 (第二口腔外科)

口腔外科領域において、外傷は日常しばしば遭遇する疾患であり、迅速な対処が必要とされる。今回我々は当科を受診した顎顔面骨折について、臨床的検討を行ったのでその概要を報告した。

対象は1974年から1996年までの23年間に当科を受診した顎顔面骨折430症例とし、年齢・性別分布・紹介経路・受傷原因・治療方法等について臨床的検討を行った。

性差は3:1と男性が多く、年代別では10歳代20歳代

30歳代で全体の60%以上を占めていた。

年次的に症例数の推移をみると1974年当科開設以来、増加傾向が認められた。

紹介経路では、院外からの紹介がほとんどで、さらに他科からの紹介が半数以上であった。

受傷原因は交通事故、転倒で全体の約75%を占めていた。

骨折部位は下顎の骨折が多く全体の61.7%を占めていた。

治療は、半数以上の骨折部位に観血的整復固定術が適応とされた。

5) 臍帯倦絡があったものの、救急車内で無事出産を完遂した1症例

太田 政雄・武田 伸夫 (上越地域消防・)
 丸田 正 (上越南消防署)
 丸橋 敏宏・丸山 正則 (新潟県立中央病院)

臍帯倦絡は、全経産婦の20%に認められ、救急隊員が遭遇する分娩時合併症としてはもっとも一般的なものであるということは聞いていたが、実際に首に巻きついている救急にあたっては初めてであり大変な救急にあたってしまったというのが実感であった。

頸部が娩出された時点で直ちに臍帯を頸部から外し顔面をガーゼで拭き羊水カテーテルにて口、鼻腔の羊水を吸引し、出産開始後2分で無事に児体を娩出する。そして刺激を与えたときに胎児が泣いた。この間はわずかであつがもっとも緊張し祈るような気持ちであった。児が泣かないと不安がる妊産婦にも、この啼泣が聞こえたようであり夫とともに声を上げ喜んでいる様子が何ともいえない感慨であった。その後臍帯クリップをかけて臍帯を切断して分娩助産は成功に終わった。

今回は臍帯倦絡の事例であったが、「母体出血」「臍帯倦絡」「肩甲難産」等々、救急隊員が予期しない異常分娩に遭遇する機会はなくならない。これらに対する十分な教育と訓練の必要性、迅速な救急隊員の処置が母親と児を助けるために大切であると痛感した。